田畑の草種（くさぐさ）

盗人萩（ヌスビトハギ）

須藤　健一

マメ科ヌスビトハギ属の多年草。全国の平地から山地の道端や林縁などに生える。背丈は 60cm ～ 1.2m。茎は細くて硬く，根元の方はやや木質化する。葉は 3 小葉からなり，頂小葉はやや大きく柄がある。

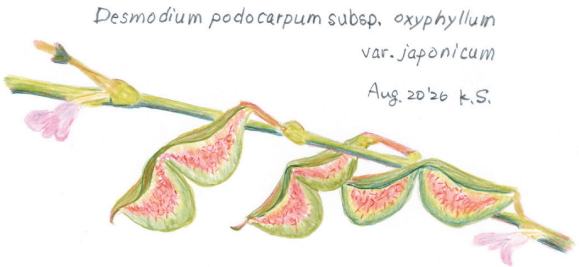
4 月頃から芽吹いてくるがしばらくは他の草に紛れて林縁などでひっそりと過ごしている。動き出すのは秋の訪れを思わす 8 月～ 9 月，長い総状花序を林縁から林道へと伸ばし，長さ 3 ～ 4mm の淡紅色の蝶形花をまばらにつける。花が小さく目立つものではないが，それでも集まると淡いピンク色に見える。

花が終わった後の果実がヌスビトハギの名の由来になった。牧野富太郎によると，昔の泥棒は室内に潜入すると足音を立てないよう足の外側だけを床につけて歩いたといい，二つ繋がった果実がその時の足跡に似ているから，という。またある説によると，気づかないうちにその種子が人に取り付く性質による，とも。

そのヌスビトハギの果実は，種子 1 個を含む節に分かれる節果で，ヌスビトハギの場合はふつう 2 節からなる。個々の節は扁平で半円形，両節の間は大きくくびれ，折れたように曲がる。上側は真っ直ぐで下側に膨らんだ形は 2 節が並ぶとちょうど眼鏡のようにもみえる。また側面に赤褐色の斑紋があることが多く，鉤型毛がびっしりと生え，この毛によって人や動物などの他のものに付着する。

枕草子の第 67 段「草の花は」で，清少納言は「ものづくし」で「萩」を取り上げています。「萩」はたいそう色鮮やかで，枝もしなやかに咲いているが，それが朝露に濡れてなよなよと広がって傾いているのもいいものだ，と言います。また，第 130 段の「九月ばかり」の段では，9 月頃のことだけれど，一晩中降った雨が朝には上がって朝日が大変はっきりと差し込んできたところに，庭先に植え込んだ萩などの草の露がこぼれそうなほどに濡れかかっているのも趣があると言い，少し日が高くなると，その重そうな萩の露がポンと落ちると人が触ってもいないのに，急に枝が上の方に上がるのも面白い，と言います。

彼女が枕草子を著した頃は，「萩」といえばヤマハギのことだと考えられますが，ヤマハギは色鮮やかではあるのですが枝はしっかりとしていて，朝露で，あるいは一晩中雨が降っていてもその雨露で垂れ下がるようなことはあまりないと思われます。そう考えるとヌスビトハギなどは，当時は「草萩」とか呼ばれていたのではないかと想像するのですが，少し花の色が淡いながらも，露で簡単にしな垂れるかと思うのです。

彼女のように細かいところまで観察できる人が，ヌスビトハギの花が「萩」のミニチュアであること，また，二つ繋がった節果が半月状で可愛いこと，そんなことを観察して枕草子に書き込んでいてもよかったのにと思います。あるいは，彼女の夫である橘則光は和歌を愛する彼女と違って武骨であったということですから，秋の夜，彼女のもとに通ってくる度に，通い路を無造作に歩いて，彼の袴の裾にヌスビトハギの節果が数多付着していたことを，煩わしいこととか，にくきものとか，思わなかったのでしょうか。

そういえば，第 151 段の「うつくしきもの」の初めに，稚児がハイハイして来て，小さなごみを見つけてかわいい指でつまみ上げ，それを大人に見せる様子ってほんとに可愛い，と言っていますが，そのゴミって橘則光が持ってきたヌスビトハギの節果であったのかもしれません。